

## 10 異類・動物

渡辺 匡一

## 一 貶められた動物たち

本集には、蛇、猿、犬、牛、兔、狐、野猪、鷲、鷹など、八十四種類もの異類・動物たちが登場する。物語の内容も前生譚・転生譚・怪異譚・闘諍譚・報恩譚など多彩であるが、仏教的価値観による世界の把握をめざす本集は、異類・動物たちを、「畜生道」（前世の報いによって堕ちる三悪道の一つ）のものとして、劣位に位置づける傾向をもつ。

典型的な例として蛇の例をみてみよう。蛇は古来から、水を司る「神」もしくは「神の化身」として、人々に畏れられ、崇められてきた動物である。もちろん本集も蛇を神としてまったく認めていないわけではない。インドの釈迦族の男は龍王の娘と結婚し、龍王の助力によって王となったし（巻三・11）、中国、漢の高祖は龍王の子であった（巻四・12）。日本においても、加賀国沖の猫島に棲む蛇は熊田の宮の神と同族とされている。しかし一方で、本集においては、蛇は畏れ敬う神ではなく、忌まわしい動物であり、罪障深い畜生、悪業煩惱の象徴としてとらえる傾向が、はつきりとみてとれるのである。

たとえば、老父が約束してしまったため、大蛇に嫁ぐはめになった娘が、観音の加護によって大蛇を退治し、事なきを得たという蟹満寺の縁起（巻十六・16）がその典型といえよう。娘の許へ訪れる大蛇には神の片鱗も見出せない。本集は、大和国三輪山の神（大蛇）が女の許に通う「三輪山伝説」以来の、神人通婚譚のモチーフを用いながらも、蛇に聖性を与えないのである。この話は『本朝法華験記』を典拠とし、『日本霊異記』『三宝絵』にも同話が存在するが、退治された蛇は、『日本霊異記』にはまだ見出せた「恐ろしい神」ではなく、「苦」を背負った「忌まわしい動物」と説明され、その苦から免れられるよう、蟹満寺が建立されたことが語られる。また、娘は只人ではなく、観音の化身であつたと解されていることから、蟹満寺の縁起は、仏と神の対決と仏の勝利を宣揚するという側面も併せもっているといえよう。他にも蛇は、桑の葉を摘んでいた女（巻二十四・9）や土塀の前で小用をたしていた女（巻二十九・39）、あるいは若い僧侶（同・40）と性交するが、そこには神との聖婚といった側面などうかがいようもない。蛇は邪淫・多淫の俗なる動物へと零落しているのである。また、人々に生け贄（娘）を捧げられ、山の神として君臨していた猿（猿神）も、獵師や僧侶によって退治され、山に棲む一介の獣へと貶め<sup>おとし</sup>られている（巻二十六・7、8）。

『法華経』提婆達多品に「執着・愛欲など煩惱の罪重く、苦患に満ちた畜生」として説かれた蛇は、神の地位を奪われ、煩惱にとらわれた人間が転生する、苦にまみれた動物へと零落してしまう。六波羅蜜寺の講仙は橘の木に（巻十三・42）、西京の女は梅花に（同・43）、延暦寺の無空律師は金銭に（巻十四・1）、横川の僧は酢瓶に（巻二十・23）と、それぞれに執着を残して死んだため、死後蛇に転生

する。また、熊野権現に参詣した紀州の女が僧に懸想し、想いを遂げられないと知るや死んで蛇となり、道成寺の鐘に隠れた僧を焼き殺してしまう話（巻十四・3）は絵巻化され、現在でも道成寺において絵解きが行われている。蛇のほかにも、臨終の際に仏を念じなかったために犬の身を受けたり（巻三・20）、窃盗、寺物借用・未済の罪により牛（巻十二・25、巻十四・37、巻二十・20～22）や羊（巻九・18、19）の身を受けたり、寺物濫用の罪により鯰（巻二十・34）に転じた例もある。悪因悪果により畜生に転生し苦を受ける人々を救えるのは、仏教以外にはない。こうした者たちは、『法華経』の写経などの供養によって、苦患から免れることになる（牛に転生した者は労役によって償う）。

悪業ゆえに畜生道に墮ちるのは逆に、前世で『法華経』を聴聞した鼠（巻四・11）や鳩（巻七・11）が後生に往生を遂げたり、蝙蝠（巻四・11）が羅漢に転生したり、蟋蟀・犬・蛇・牛・狐・蚯蚓（巻十四・15～25）が法華経持経者に生まれ変わったりする、善因善果の話も見られる。動物にかかわる転生話は『法華経』の功德を説く靈驗譚として機能していることが多い。

仏の前生として動物を語る話は、巻五に集められている。仏の前生譚（本生譚、ジャータカ）には、過去世、預かった猿の二子を鷲に奪われた獅子が、自分の股の肉をちぎって猿の子の替わりに差し出した話（14）のほか、鹿（18）・象（26）・大魚（28）などに生まれた仏が、さまざまな善行を施して多くの命を救った物語が記されている。ただし、仏の前生譚として扱う他の諸経・典籍とは異なり、動物を用いた譬喩譚として採られている話も見受けられる。昔話「月の兎」として著名な、兎が自らを焼き、修行者を供御した話（13）や、助けてやった亀の恩返しによって窮地を脱した男の話（19）、や

はり昔話「猿の生き肝」で知られる、猿の生き肝を取ろうと計略をめぐらした亀が失敗する話（25）などには、動物たちが仏の前生であるとの文言がない。25の話末には「昔モ獸ハカク墓無クゾ有ケル。人モ愚癡ナルハ此等ガ如シ」と記されており、いやしい獸の愚かさを指摘して、人も愚かであれば獸と同じであると説いている。動物の報恩譚は、亀のほかにも蜂（巻二十九・34）や猿（同・36）の話があり、いずれの話にも「動物ですら恩を忘れない」といった文言が付せられ、聞き手、読者への提言がなされている。

## 二 人々をたぶらかす動物たち

人をたぶらかす動物といったらなんといっても狐や狸だろう。本集では、鬼や霊とともに狐（狐・野干）や野猪（狸）が引き起こす怪異を、巻二十七に「靈鬼」の題を付してまとめて載せている。このうち狐の話は37～41の六話（32、33、42～44も狐の話と考えられる）、野猪の話は34～36の三話をみることができるが、両者が引き起こす怪異は、巻二十七の主人公である鬼とは違い、人を怖がらせることはあっても、殺害に及ぶことはない。狐は梶<sup>すぎ</sup>の太木に化けたりもするが（37）、多くは美女に化けて人をたぶらかそうとする（38、39、41）。しかし正体を見破られ射殺されるか（37）、悪臭ただよう尿をかけて相手をたじろがせ、その隙になんとか逃げおおせるといった顛末を迎える（38、39、41）。ほかに狐の話としては、やはり美女に化けて男と契ったために死んでしまった狐が、『法華経』の供養によって忉利天に転生した話（巻十四・5）や、有名な、獅子や虎の威を借りて諸動物をおどす狡猾

な狐の話（巻五・20、21）などもみられる。美女と変じて人と交わる狐のモチーフは、中国『任子伝』『任子怨歌行』など中国伝奇小説の世界とのかかわりがうかがえ、さらに、人を惑わす狐のモチーフは、『神明鏡』や謡曲『殺生石』、御伽草子『玉藻前』などにつながっていく。芋粥の話では、藤原利仁の命令によって、利仁の領国である敦賀まで伝令の役を勤めたりもしている（巻二十六・16）。

野猪の末路は狐以上に悲惨である。野猪は音（34）や光（35）を発したり、怪物（36）に変じたりして人をおどかしてはみるものの、最後にはことごとく射殺されてしまうのである。野猪の怪異譚はどこか間が抜けており、滑稽味が付きまとう。これは「人謀ラムト為ル程二糸辛キ目ヲ見タル」（41）、人を騙そうとしたので、辛い目に遭うのだとの文言にみられるように、狐や狸が人より劣位の、愚かな存在として位置づけられていることに起因しているといえよう。

### 三 動物づくしの巻

巻二十九は「悪業」の副題をもつ巻であるが、後半部（31～40）には、虎・犬・蛇・鷲・鷹・猿・蜂・蜘蛛・牛・狼・蛇など、動物の話がまとめて載せられている。動物の話が「悪業」の巻に収められる理由が、仏教でいう三悪道の一つ「畜生道」とかわるることについては、今までみてきたとおりである。内容も、虎と鰐（31）、犬と蛇（32）、鷲と蛇（33）、猿と鷲（34）、蜂と盗賊（36）、蜂と蜘蛛（37）、牛と狼（38）といった動物同士あるいは人との格闘や、蛇との性交（39、40）といった淫欲にまつわるものであり、動物譚を所収するに際して、畜生道以外に、仏教でいう十悪（殺生や邪淫などこの



世における十種の悪業）が考慮されたことも考える必要がある。

犬は獺の供として常に獺師とともにし、忠節を尽くす動物として描かれる。32話にみられる犬と蛇の格闘話は、獺師を襲おうとした大蛇に気が付いた忠犬が、大蛇を噛み伏せ、主を救ったという話。

猿神退治においても、主の命令によって多くの猿を噛み殺して廻った（巻二十六・7）。また、蚕を飲み込んだ犬の鼻から上質の糸が出、犬の死後、犬を埋めた桑の木にできた繭からとれる糸も素晴らしきものであったので、「犬頭の糸」といって朝廷に納め、天皇の召物の材料となったという話もある（巻二十六・11）。犬を埋めた桑の木に繭が多生した話は、犬と馬の違いはあるが、中国の『太古蚕馬記』や日本の馬娘説話、オシラ祭文など、伝承世界への広がりを見せる。

獣の王が獅子ならば、鳥の王は鷲である。33話では、肥後国の某が飼っていた鷲が寝入っている隙に七、八尺ばかりの大蛇に五重六重に巻き付かれてしまうが、やがて目を開くや、脚で大蛇をつかみ上げてふりほどき、たちまちのうちに蛇を三つに食い切ってしまう。見物していた人々はさすがに鳥類の王であると賛嘆する。しかし感心ばかりもしてられない。鷲は赤子をさらって食べてしまう危険きわまりない動物なのである。但馬国の住人は赤子を鷲にさらわれてしまうが、十数年後、丹後国を訪れた際、成長したわが子と奇跡的に再会を果たす。鷲がさらった赤子を生きのまま落としたことも、再会がなかったことも宿縁としかいいようがなかったという（巻二十六・1）。出典とされる『日本霊異記』や同系の『扶桑略記』『水鏡』のほか、親が鷲にさらわれたわが子と再会を果たす話は、良弁杉の伝説（『東大寺要録』『七大寺巡礼私記』など）や三嶋大明神の縁起（『神道集』『みしま』など）な

どもみることができる。

鷲と並ぶ猛禽類の雄といえは鷹だろう。鷹狩は王の主催する儀式でもあった。重明親王が藤原忠文から譲り受けた名鷹は、狩をしないばかりか、元の主のところへ飛び帰ってしまう（34）。本集はこの話を、獣でも感じる主従の縁の深さと説くが、『江談抄』に収められている同話では、重明親王が王の器ではなかった証として説いている。

我々は、おびただしい数の異類・動物譚を通して、明滅を繰り返すさまざまな「生」を凝視しようとする編者の姿を見出すことになるのである。

【参考文献】

- 池上洵一『今昔物語集の世界』（筑摩書房、一九八三年）  
 林道江「動物変身譚の展開」（『平安文学研究』七二、平安文学研究会、一九八四年十二月）  
 小峯和明『今昔物語集の形成と構造』（笠間書院、一九八五年）  
 桜井好朗『神々の変貌』（ちくま学芸文庫、二〇〇〇年）